

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『明石家さんまヒストリー1
1955～1981—「明石家さんま」の誕生』

エムカク 著 | 新潮社、2020、430pp.

本書は、明石家さんまについて徹底的に調べてまとめたものである。メールマガジンでの連載をもとにし、第1巻として、1955年の出生から1981年までを扱っている。

明石家さんまのような有名人のことなら、インターネットで検索したら何でもすぐに分かるだろうと思うかもしれないが、そうでもない。例えば私が初めて明石家さんまをテレビで見たのは、小学校4年(1980年度)の終わり頃に「花王名人劇場」で小林繁投手のものまねをした時だと覚えている。しかしそれが何月何日の放送なのか、ネットで調べても分からなかった。

著者は、新聞、雑誌、書籍、本人のテレビやラジオでの発言などを丹念に調べている。よく調べたと自称しているものに間違いが見つかる腹が立つが、本書は最後まで心地よく読み進めることができた。

随所に引用されるテレビやラジオでの明石家さんまのトークが面白い。明石家さんまは、文字に起こしても面白いと改めて思わせてくれた。これは、本人の力量のほかに、豊富な材料から特に面白いものを厳選した、著者の力によるところも大きいだろう。

1977年以降は、各年の「明石家さんま活動記録」が各章末に付いていて、たいへん充実している。私が明石家さんまを初めて見た「花王名人劇場」が、1981年3月8日の放送であったことやその内容も分かる。

2021年6月には続編の『明石家さんまヒストリー2 1982～1985』が出版され、第3巻以降も続くようである。今後も楽しみである。

(評／『彦根論叢』編集委員／鍋倉聰)

『団地映画論—居住空間イメージの戦後史』

今井瞳良 著 | 水声社、2021、318pp.

本書は、1960年代から2010年代までの日本の団地映画を広く取り上げるとともに深く掘り下げ、団地映画を「居住空間イメージ」として分析し、日本映画が団地映画として批評性を持ち続けていたことを明らかにすることを試みている。

団地映画として思いつくのは、有名な団地妻シリーズのほかに、以前は真っ白い団地棟が憧れの対象として描かれていたり、その後は団地の閉鎖性や均質性が問題にされたり、近年ではノスタルジアの対象になっていたり、老朽化が問題になっていたりするといったところだろうか。

これに対して本書は、『団地への招待』、『喜劇 駅前団地』、『下町の太陽』、『しとやかな獣』、『フランケンシュタイン対地底怪獣』、『私は二歳』、『団地 七つの大罪』、『彼女と彼』、『団地妻シリーズ』、『壁の中の秘事』、『現代好色伝 テロルの季節』、『燃えつきた地図』、『遠雷』、『家族ゲーム』、『トカレフ』、『毎日が夏休み』、『震える舌』、『ゴンドラ』、『どこまでもいこう』、『クロユリ団地』といった様々な団地映画をおおよそ年代順に詳細に取り上げ、映画のシーンを細かく分析し、また団地や団地映画に関する膨大な文献を参照することによって、団地映画がもつ意義を示している。

膨大な文献を参照するのはいいが、引用文献を抜き書きして切り貼りしてつなぎ合わせたものが全体を通して多くを占めていて、著者自身が論じている箇所は意外と少ない。著者自身の言葉による映画論が次に待たれる。

(評／『彦根論叢』編集委員／鍋倉聰)

